

SNW 市民と専門家の対話会イン福岡 2022 詳細報告書

2023. 2. 18

世話役: 金氏 顯



政府は昨年末の GX 実行会議で原子力再稼働加速、運転期間延長、新增設の検討などと共に地層処分文献調査地域の拡大を、原子力政策とする方針を打ち出した。しかし、高レベル廃棄物地層処分立地は北海道2町村以外の他地域からの文献調査申請はいまだなされず、全国約 10 か所という目標に程遠い。そこで九州でも一般市民の関心を喚起すべく、福岡市で高レベル廃棄物地層処分にテーマを絞って開催した。

市民との対話会は2018年19年の北九州に続き3回目だが、テーマを放射性廃棄物最終処分に絞っての開催は初めて。従って参加市民の募集には困難が予想された。

そこで、九州のエネルギーを考える会(会長: 金氏)から、昨年11月にNUMO学習支援事業を活用して幌延深地層研究センター見学会に参加した石原進様や歴史観光事業で幅広い人脈を持つ井上政典様の協力を得て20名の参加を得た。参加市民は各業界でのオピニオンリーダー的な方々ばかりであった。

1. 対話会概要

- 1) テーマ: 高レベル放射性廃棄物地層処分について考えよう～市民と専門家の対話会イン福岡
- 2) 日時: 令和5年1月21日(土)14:00～17:45
- 3) 場所: 電気ビル共創館
- 4) 協力: 九州のエネルギーを考える会(九州エネ会)
- 5) 参加市民: 20人⇒5グループ
- 6) 参加シニア(10名)、なおファシリテータは原子力全般専門家が務めた。
 - ・原子力全般専門家: 針山日出夫、岡本弘信、古藤健司、山崎智英、金氏 顯
 - ・地層処分専門家: 坪谷隆夫、湯佐泰久、出光一哉、野村茂雄、富森卓(NUMO)
- 7) グループ分け(○FT(ファシリテータ)、●地層処分専門、*九州エネ会会員(幌延参加))
Aグループ: ○ 金氏 顯、● 湯佐泰久、* 金氏 顯

Bグループ：○ 針山日出夫、● 富森 卓、* 石原 進

Cグループ：○ 岡本弘信、● 野村茂雄、* 井上政典

Dグループ：○ 古藤健司、● 出光一哉、* 坂口恵二

Eグループ：○ 山崎智英、● 坪谷隆夫、* 堀みゆき

8) プログラム

14:00～14:20 開会挨拶(金氏)、地層処分の情勢(坪谷)

14:20～15:20 講演; 高レベル放射性廃棄物地層処分について、講師: 九大出光一哉教授

15:00～17:00 5グループに分かれて話し合い

17:00～17:30 全体打合せ: 各グループ報告(シニア)、感想等(石原様他)

2. 開会挨拶と講演



1) 開会挨拶(金氏 顯)

今日は土曜日にも拘らず多くの市民の皆様にお集まりいただき、有難うございます。

原子力発電は福島第一事故の前は全国の電力需要の約 30%を供給し、事故後の現在は約 6%を供給しており、GX 実行会議での岸田総理方針により今後はさらに増加します。九州は既に電力の約 40%を原子力が供給、おかげで電気料金は東京などに比べ約 30%も安く、原子力の恩恵を最も受けています

一方、原子力稼働に伴って発生する高レベル放射性廃棄物の最終処分場立地の為の第 1 段階である文献調査は北海道の 2 町村以外からの応募がありません。全国約 10 か所から徐々に絞り込んでいく方針ですが、マスコミなどで核のごみ、反対派からは迷惑施設と言われ、全国の自治体から敬遠されているのが実態です。

(主催、協賛、参加シニアなど紹介: 省略)

今日はまず SNW 坪谷会長からこの問題の情勢をお話し、そのあと九州大学教授でもある出光先生に放射線被ばくや高レベル放射性廃棄物地層処分について約 1 時間講演をしていただきます。その後約 2 時間グループ対話をしていただきます。どんな質問でもご意見でも出してください、この問題をどうしたらよいか活発な対話を期待しています。よろしくお願いします。

2) 最終処分を巡る情勢(SNW会長坪谷隆夫)

最終処分に係るこれまでの日本と世界の主な経緯、GX実行会議(2022年12月22日)の概要と岸田総理の最終処分に関する発言、翌日の第7回最終処分関係閣僚会議後の松野官房長官緒記者会見発言を紹介。(詳細は別添資料参照)

- 3) 基調講演「高レベル放射性廃棄物最終処分を考えよう」、講師：出光一哉九州大学教授
前半は放射線に関する霧箱(映像)、放射線計測器による放射能測定、粘土による止水実験、ウランガラス、ガラスや粘土のアナロジーなど大変好評。後半に最終処分の仕組み、科学的特性マップ、3段階の調査、世界の動向など。(詳細は別添資料参照)

3. グループ対話の詳細

参加シニアはファシリテータを務めるシニア5名と地層処分の専門家5名、計10名。後者はSNW会員が1名不足したので、NUMO富森卓氏にお願いしたが、結果的には双方に非常に効果的であった。各Gに2名ずつで対応し、市民との対話は非常に盛り上がった。

約2時間のグループ対話のあと、各GごとにFTシニアと専門シニアが発表、最後に参加市民を代表して石原進氏(JR九州元会長)に、原子力再稼働の重要性和新增設の必要性、その為には最終処分の立地が必須であることは論を待たない、昨年幌延深地層研究センターを見学し技術的に可能であり迷惑施設ではなく地域の発展に貢献するものと確信した、今日のグループ対話は活発な議論で効果的だった等、力強く語っていただいた。

■Aグループ

1) 参加者：市民4人、シニア：湯佐泰久、金氏 顯

2) 市民からの質問や意見など

- ・今まで高レベル放射性廃棄物の問題は耳にしていたが自分で考えることは無かったので、聞いてみたいと思った。
- ・高レベル放射性廃棄物最終処分場の構造や安全性を確かめたかった。
- ・最終処分場建設の雇用の規模と継続性は？
- ・日本は狭いので、とても難しいと思った。
- ・地震大国なので調査研究も進んでいるのに、なぜ一般に知られていないのか？
- ・既に廃棄物はあるし処分しなければならないのに、なぜ反対するのか？
- ・若い専門家の育成状況は？
- ・日米英の原子力推進協力を岸田総理は約束したので、最終処分問題も進展するのか？
- ・地表で必要な面積は？
- ・廃棄物を地上保管し発電できないか？
- ・身の回りに沢山の放射能があることにびっくりした。
- ・一般ごみは発生した自治体内で処分する。これと同じように各電力会社管内で処分場立地をすべきではないか？九電の原子力で発生した廃棄物は九州内で。
- ・政府は市町村レベルの自治体首長へ周知と勉強の機会を与え、応募してもらうよう働きかけるべきだ。
- ・口は島内の発電施設で電気を賄っているのに、九電の原子力の恩恵は直接的には受けてない。しかし、九州エネ会での学習会で科学特性マップでは好ましくない地区ではないこと、安全性も問題ないことなどを知った。口に立地しなくてどこにするのか？

3)まとめ(発表)

- ①学校教育でエネルギー学習のなかに高レベル放射性廃棄物最終処分も教えるべき。
- ②一般ごみと同様に、廃棄物が発生した各電力会社管内の自治体に少なくとも一自治体から文献調査に応募するよう、政府、NUMO、電力会社は働きかけてはどうか。北海道は既に2町村が応募し文献調査中、また四国も過去に応募した実績があるので、残りの7電力会社管内から一自治体が応募すれば、全国で10か所になる。

■Bグループ

1)参加者:市民4人、(専門家)NUMO 富森 卓、SNW 針山日出夫

2)対話の概要:

先ず、自己紹介と併せて聞きたいこと・言いたいこと・知りたいことを各自よりお話ししてもらい、対話を進めた。

我が国としては高レベル放射性廃棄物の最終処分や原子力政策をどのように進めるのが良いのか、現在の進め方はこれでいいのか等、主に政策的側面について議論した。

3)対話での主な話題と主張(順不同):

- ①最終処分を進めるには原発再稼働・新增設が何としても必要とのアピールが欠かせない。そして今が好機であり攻めの姿勢で行動すべきでは。
- ②エネルギー問題・原発の必要性・廃棄物問題への関心を高める必要あり。高レベル放射性廃棄物の問題は原発利活用の恩恵に浴してきた国民一人一人の問題であることを自覚するような理解活動が必要で、本件はエネルギー安全保障上の重要課題であることを重点的に説明すべき。
- ③政府が原子力の必要性と原発は安全であることを説明することが最終処分地選定への力強いエールになる。この認識を関係者で共有する事が肝要。但し、安全神話の吹聴は逆効果であり欧米のやり方なども参考にしてリスクで安全を理解できるようリテラシーの醸成が課題。
- ④NUMOの活動に敬意を表する。ご苦勞があっても挫けずにやってほしい。
- ⑤最終処分のバリアーは「放射線への恐怖・万年単位の安全管理のリアリティーへの理解・まずは原発止めよ!の思考停止レトリック」。これらのバリアーを取り除く基盤的活動が肝要でありNUMOの活動領域外の強力で持続的な支援が必要。
- ⑥メディアの影響力は絶大なので、メディアとの協調活動が効果的。NHの責任も大きい。感覚的に恐怖心をあおる稚拙な報道姿勢を反省させることも肝要。メディアは放射線の怖さを定量的に説明する責任あり。
- ⑦政府トップは自治体と協調し、「我が町に処分地を!」といえる環境整備が必要。自治体の首長の行動が要諦であり政府の役割は重い。

■Cグループ

1)参加者:市民3人、専門家:SNW 岡本弘信、野村茂雄

2)対話の概要

- ①各自自己紹介の後、坪谷 SNW 会長および基調講演出光講師の話の踏まえて、質問や意見をポストイットに書き下ろすのももどかしく、意見交換が始まってしまった。幌延見学会に参加した方とその報告を 100 分の映像に仕上げたご夫妻が市民として参加されたこともあり、質疑応答というより地層処分の諸課題に対してこうあってほしいとの意見が飛び交った。
- ②地層処分場の候補地として考えているところはあるのだろうか。国有地や無人島を選べないか。複数の処分場もありうるのではないか。
- ③原発の再稼働を進めることが、地層処分計画をうながすことになり得るので、原子力規制委員会が力を発揮してほしい。
- ④日本の地層技術、鉱山技術は誇れるものであり、黒 4 ダムや鉄道トンネルの実績から、地下の処分場建設はできるものとする。幌延見学時にもそう実感した。しかし後 10 年何もしないと、こうした技術はなくなる。
- ⑤地域振興策の提案を行って発信していくことが、地層処分場の実現に向かっていくこととなる。過疎地の現状や従来の農業・魚業に甘んじるのではなくて、近代的な街づくりや新しい技術の産業化を目指すのが良い。関係者は、技術だけでなく、夢のある振興策を語るのが重要。
- ⑥多くの地域や自治体が文献調査の事業にまず参画して地域振興策の作成に取り組んでほしい。
- ⑦国、県、当該自治体、隣接自治体との関係では、当該自治体の住民の思いを大きくするのが第一である。
- ⑧反対する人をどうするか。どう対処するかについて、理解者を集め、送り込む。影響のある人を連れていく。プロの目で、デベートに強い人で対応することが大事。何をやっても反対する人がいるが、地元振興が進むと変わるはず。
- ⑨スウェーデンの処分場での雇用は 900 名程度、日本は 3,000~4,000 名。この差は規模の差で、前者は使用済燃料 1.2 万 t（キャニスター 6,000 本）に対し、日本は固化体 4 万本と多いため。
- ⑩原子炉の再稼働にかなりためらいがある中、廃棄物処分がしっかり浸透すると、市民もかなり安心すると思っていたとの考え。

■Dグループ

1)参加者:市民4人、専門家:古藤健司、出光一哉

2)主な対話内容

- ①シニアの紹介は開会時に行われたので、参加市民の皆様の自己紹介からスタートした。先ず、幌延深地層研究センター見学会に参加された市民の方からの報告と感想:想像以上に立派な施設であったとのことと参加者の懇親が大いに盛り上がったとのことであった。
- ②基調講演者の出光教授が専門家として加わっているのが、講演・実演内容についての質疑とそれに対する追加の説明などがなされた。特に、放射能と放射線の人体への影響が話題になった。例えば、「富士山の天然水」や「阿蘇の天然水」など、岩盤地層を長い年月

をかけて流れてきた伏流水を飲料水としているが、高レベル放射性廃棄物地層処分は本当に安全で安心できるのか？から始まり、福岡にはラジウム・ラドン温泉があることや、医療の現場では(昔は)RI トレーサーやX線の取扱いが往々にして乱暴であったりもしたが、放射線障害で問題となった事例は特に聞かないとか。歯科医師の方もおられたので貴重なお話・ご意見が聞けた。

- ③一般産業廃棄物の処理ではリサイクルが盛んに行われるようになってきたが、原子力廃棄物の処理ではどうなのか？また、原子炉の耐用年数が話題になっているが、耐用年数はどのように決まるのか、その実態は？最近の話題として「小型炉」が報じられているが、どのようなものか？メリット・デメリットは？など、原子力全般の話題にも及んだ。
- ④高レベル放射性廃棄物地層処分立地の問題においては、一般の人々の放射能・放射線の人体への影響への知識・理解がまだまだ足りないところにあるのではないかと「安全だ！と言われても安心できる知識がない！が現状？」がグループ対話の暗黙の認識と思われた。

■Eグループ

1)参加者:市民5名、専門家:坪谷隆夫、山崎智英

2)対話の進め方

坪谷SNW会長の「地層処分に関わる主な経緯」、出光先生の「高レベル放射性廃棄物処分を考えよう」を聞いて分からないこと、疑問に思ったことを中心に対話を進めた。

3)主な内容

- ①高レベル放射性廃棄物は、青森県六ヶ所村にある日本原燃で貯蔵管理している。六ヶ所村で処分することができないのか。また、幌延深地層研究センターで処分のための地下施設を作って研究しているが、この施設を有効に利用すべきである。
- ②地層処分のプロセスで首長の同意が必要であるが、首長の同意は、個人が攻撃される可能性があるため、決定は国が行うべきである。首長は安全と分かっているにもかかわらず、同意することが難しい。
- ③原子力が怖いという人たちは、知識不足であり勉強していただきたい。このためには、事業者もしっかり情報を発信する必要がある。

■各グループ発表、市民代表者の感想

1)各グループの二人のシニアからそれぞれ対話の概要を発表した。

2)市民を代表して、Bグループの石原進様(元JR九州会長)より、原子力再稼働の重要性と新増設の必要性、その為には最終処分の立地が必須であることは論を待たない、昨年幌延深地層研究センターを見学し技術的に可能であり迷惑施設ではなく地域の発展に貢献するものと確信し、今日のグループ対話は活発な議論で効果的だった等、力強く語っていただいた。

(グループ対話、発表などの画像)



4. 参加シニアの感想

【出光一哉】

今回の対話会には、概ね賛成意見の方々が参加されており、混乱はなかった。

私が参加した D グループではシニア 2 人(古藤健司氏、私)に対して、幌延見学経験者 1 名他 2 人であり、素朴な質問や今後地層処分を進めるための課題について議論された。

- ・技術的な安全を前面に出しても、安心させることは難しい。
 - ・安心を得るには、放射線に対する正しい理解が必要なので、教育が重要
 - ・産業廃棄物は安全に処分されているのかという疑問
(放射性廃棄物の方がしっかり管理されているように思えるとのコメント)
 - ・産業廃棄物はかなりリサイクルされているが、何が処分されているのか？
(将来的には太陽光パネルが多量に廃棄される可能性があることを紹介した)
 - ・医療廃棄物は安全に処分されているのか？
(海外では、毒性の高い産業廃棄物を地層処分する計画もあることを紹介した)
- 等のコメントや疑問があった。

参加されている方の意識が高く、手応えのある対話会であった。

【岡本弘信】

今回の対話会世話人の金氏氏の下で、用意周到で明るい広い場での対話会に参加でき、ありがとうございました。坪谷氏や出光氏から地層処分計画の数多くの課題が浮き彫りにされてグループ対話に入り、さてどこからとファシリテータとしては戸惑いを感じた。

Cグループではシニア2人に対して、幌延見学経験者及びその報告会映像の編集者2人ということもあり、長年取り組んできた地層処分研究の奥深さをよく理解されており、その計画の実現に向かって取り組むべきとの熱い思いが伝わる対話ができる。

日本の誇れる鉱山技術やトンネル技術などを駆使することで地下の処分場を作れるに違いない、それを支える新技術や産業の場としての地域振興策を提案することが重要である、国や県のリードというより、当該自治体から声を大きくすべし、など力強いものを感じた。日本の地質調査を徹底して、堅固な地層処分システムを目指して、技術開発者は存分に力を発揮してもらい、地層処分場の実現を目指すことが、原子力関係者の責務であると改めて思った福岡での対話会でした。

【古藤健司】

「高レベル放射性廃棄物最終処分を考えよう！」をテーマとした一般市民とのグループ対話でしたが、参加された方々は原子力発電推進に理解ある市民の皆さんでありましたので、(否定的な意味ではなく)地層処分推進を盛り上げる決起集会の様相を感じました。地道な活動を続けておられるNUMOの職員の方々やその支援活動を行っている(SNWも含め)皆様の“元気付け”になったようです。ただし、本来のミッションは、地層処分への理解が乏しい市民の方々へ「安全」で「安心」できる最終処分法であることを一人でも多く認識してもらうことですので、難しいことですが、原子力発電・地層処分に対して斜に構えている一般の方々との対話にも精進しなければと感じました。その人達との目線の合った対話を心がけること、まだまだ勉強です。

【坪谷隆夫】

幌延見学にも参加され、活動をされている女性グループを中心とする5名の市民が参加されたグループで、多様な考えが飛び交うグループ対話でした。ファシリテータは山崎さまが務められました。市民の方からエネルギー問題、最終処分問題などいくつもの質問が冒頭からあり、それに一問一答のようにお答えしてしまいましたが、対話ルールから若干はずれたようになって反省しています。

「高レベル放射性廃棄物は、いたずらに怖がるものでないことがわかった」を発言があったが、この一言は、グループ対話を実施し成果を物語ると思いました。SNWの多くの対話会の参加者が学生中心であることと比べて、処分地選定プロセス、廃棄物中の放射能低減など多岐にわたる疑問や質問が出ました。参加の皆さんが日常的に活動をされている方々であることが、多様で活発な意見交換が出来る背景にあるように思います。

【富森 卓】(NUMO 地域交流部専門部長)

この度は、地層処分に関する福岡市民の方々との対話会に参加する機会をいただき、誠にあ

りがございました。こうした対話会は 2017 年の科学的特性マップの公表後に、国とNUMOが共催の形で全国でも開催してきており、これまでに 160 回の実績を重ねてきました。しかしながら、当日の会場でも私からご紹介しましたが、いずれの会場でも「地層処分に関する意見交換」よりも「原子力発電の再稼働の是非」を議論したいという方々が多く、私どもNUMOの事業の本筋である地層処分の問題になかなか辿り着けないというジレンマを毎回感じています。

こうした中、今回の会合は「今すでに存在している高レベル放射性廃棄物の処分を実現するためには」というテーマが明確に示され、参加された方々は皆この問題に対し、真剣なまなざしで議論されているという雰囲気や部屋中に満ちていました。各テーブルの報告内容も、処分場の実現に向けた前向きな発言をお聞きすることができ、私どもの日頃の説明会では得難い、実りの多い会合でした。

当日も議論されましたが、NUMOは現在、北海道の2町村で文献調査を行っていますが、今後の調査の動向は不透明です。寿都町と神恵内村に続いていただける地域の掘り起こしにも全力で取り組んでおりますが、九州エリアでも是非この調査にご協力いただける地点が現れるよう、NUMOの理解活動に対する皆さまのご支援を、今後とも何卒宜しくお願い致します。

【野村茂雄】

我々C Grの市民は3名と少なかったが、有意義な対話ができる。幌延深地層研究センターへの視察、関連報告会「核廃棄物処理の技術は確立している！」のDVD編集も手掛けた方々で、最終処分について、その状況をよくご存じでした。

対話のポイントは、処分場はハイテク産業の基地でありこの辺の明るい将来展開をもっとアピールすること、我が国の処分場は複数立地が望ましく九州から文献調査に応募する地区が出てくるよう動きたいことの2点。

この他、我が国の優れた技術力、反対・理解者への対応、海外の処分場建設状況などの対話も行った。

最終処分場応募への力強い支援者であり、こうした市民の代表格のメンバーは、今後も大切にお付き合いすべきと思いました。今がチャンスであり、関係者はしっかり対応しろ、との激励を頂いた。

【針山日出夫】

今回の如き専門的なテーマで市民の方々と専門家との対話会が実現したことは驚嘆に値する。対話会の実現に尽力された金氏様・井上様・山崎様・坂口様や土曜の休息を返上して参加頂いた石原様ほか市民の皆様に感謝申し上げたい。

対話会は終始融和的雰囲気の中で進み、参加者は濃密で創造性と熱量に溢れる対話現場を感じたものと推察する。これは原子力の普遍的価値の共有をベースとした共感が齎すものと感じる。

シニアネットワーク連絡会はボランティア活動を行動原理とするものであり金銭的な報酬は受け取らないが、今回は以下の如き得難き報酬を貰ったと感じる。

①市民の皆さんと「原子力の普遍的価値や地層処分の重要性」を共有した事

②日本が理性と見識で導かれる一流国であるために我々シニアもまだまだ出来ることがある事を教えて頂きエネルギーを与えて頂いた事
福岡市民の皆様、ありがとうございました！

【湯佐泰久】

対話会は、SNW会長の坪谷氏による地層処分に関する情勢についての簡潔な説明のあと、九大の出光教授による地層処分の説明が続いた。実験も行われ、説明はユーモアがあり、分かり易かった。その後、グループごとの議論の場に移った。ファシリテータは金氏 顯氏で、湯佐は地層処分の説明を分担した。

前半の話題は廃棄物の熱利用や教育の必要性などであった。その後、地層処分の必要性・安全性については全員が納得された上で、さらに、いかに処分の立地を進めるかとの話題になった。内容は地域振興策という具体的な意見で、これは、参加市民の方々が街おこしなどの地域振興を担っておられることが大きいと思われる。

後半に、もっと、文献調査に手をあげる地方自治体が増えるべきで、そのための方策について話題が集中した。一つ原発サイトに一つの処分場をと、都道府県ごとに、電力会社ごとに、少なくとも一か所は手を挙げていくべきで、そのように政府も推奨すべき、との意見は説得力があると感じた。

今回の対話会は良く準備がなされ、かつ、参加市民は市民のオピニオンリーダーともいえるべき方々で実に有意義だと感じた。なお、今回の対話会では、シニアメンバーはファシリテータと地層処分の質問担当と役割を分担したが、この方法はそれぞれの役割に集中できて良かったと考える。(原子力と地層処分とでは内容が異なる点が少なくないからである。)

【山崎智英】

今回の対話会は、学生との対話会と違い、論点が明快であり、また参加者の方も問題点を理解していた。ファシリテータとしての実力のなさを坪谷会長に助けて頂いた。地層処分のプロセスも首長ではなく国が行うべきとの意見もあり、非常に頼もしく感じた対話会でした。

5. 世話役としてのまとめと感想(金氏 顯)

SNWの市民との対話会は2018年、2019年に北九州市で開催して以来、新型コロナ禍もあり行っていない。3年経って社会はウィズコロナに移行しつつあるので今度は福岡市での開催を考えた。一方、九州エネ会では高レベル放射性廃棄物地層処分のNUMO学習支援事業で11月に幌延深地層研究センター見学に9人が参加し、12月に報告会を実施した。そのきっかけ参加者の問題意識は高まった。そこでこの体験とSNWの市民との対話会をコラボすることを思い立って今回の対話会の開催に至った。

開催に当たっては両会会員から全面的な支援を受けた。SNW 坪谷会長にはグループ対話の進め方や地層処分専門家の人選、SNW九州の山崎代表幹事には電気ビル共創館予約や会場設営と資器材準備など、九州エネ会の井上政典様には一般市民募集、石原進様始め幌延深地層研究センター見学された会員には市民として参加いただいた。皆様に感謝します。

そして SNW 会員8名に NUMO から1名参加いただき、対話の相手もテーマも学生との対話会とは全く異なるため、事前に対話の進め方について相談し、準備万端整えた。

参加いただいた市民は当初30名の目標に対し20名だったが、皆さんはそれぞれ色々な事業や地域社会活動などにおけるオピニオンリーダー的な方々ばかりであったので、各グループとも活発な対話が行われ、それぞれ特色ある意見、提案が生まれ、また参加者それぞれの問題意識も広がったようだ。これを今後どう展開するか、考えたい。

高レベル放射性廃棄物最終処分立地という国家的な大課題に対して、我々の活動はあまりにも小さな草の根活動である。しかし「百里の道も一歩から」、九州から文献調査応募の自治体を！という高い目標を目指し、来年度も SNW/エネルギー会と九州エネ会の活動を皆様と相談しながら継続していきたい。

6. 参加市民の事後アンケート集計結果の概要(参加20人全員から回答を頂いた。)

1) 本日の対話会に参加した理由(動機)は多い順に:

- ①友人・知人に誘われた(13)、②高レベル放射性廃棄物の処分に興味があった(10)
- ②原子力発電に興味があった(10)、③廃棄物問題に興味があった(7)
- ③エネルギー問題に興味があった(7)

2) 高レベル放射性廃棄物イベント参加回数:

- ①初回(13)、2回目(3)、3回目(3)

3) 「高レベル放射性廃棄物の処分」に関して:

内容を知っている(8)、言葉だけは聞いたことがある(8)、知らなかった(3)

4) ア) 高レベル放射性廃棄物処分方法の中では地層処分が最も適切な方法であるに対して:

そう思う(14)、どちらかと言えばそう思う(5)

イ) 高レベル放射性廃棄物「地層処分」は必要だ:

そう思う(16)、どちらかと言えばそう思う(3)

ウ) 地層処分に適している場所が国内に存在する:

そう思う(15)、どちらかと言えばそう思う(2)、どちらともいえない(1)、分からない(1)

エ) 地層処分は安全に実施できる:

そう思う(15)、どちらかと言えばそう思う(3)、どちらともいえない(1)

オ) 地層処分を進めることに賛成:

そう思う(18)、どちらかと言えばそう思う(1)

カ) 地層処分事業に協力いただく地域の人々に対し敬意や感謝の念を持つことが重要:

そう思う(18)、どちらかと言えばそう思う(1)

キ) 地層処分事業に協力いただく地域に対し経済的・財政的な支援を行うことは適切:

そう思う(18)、どちらかと言えばそう思う(1)

5) 本日の対話会について感想をお聞きます。

<基調講演について>

十分理解できた(14)、大体理解できた(5)

<本日の対話会全体について>

満足できた(14)、どちらかと言えば満足できた(6)

- ・専門家の方からの教えや質問への回答など、自分だけでは得ることのできない知識や考え方を得ることができた。
- ・普段、女性同士でこのような会話をすることがほとんどないので、今日はいろいろな話を聞くことができ良かった。
- ・自分の知らないこと(日本国の政治背景、国民性など)、問題であることを身近に感じた。
- ・問題点と解決策が見えたが、時間がかかることも理解できた。
- ・技術的には何も心配していないのであとはどう周知するのかが問題

6)本日の対話会について

<本日の会に参加した感想など>

- ・放射性廃棄物の処分方法について、今まで怖がっていたほどではないことが分かった。
- ・誰かが行動しないと、解決できないことが分かった。
- ・電気代が上がって庶民の関心が高まっている今こそ、前に進むチャンスである。技術者がもっと主張すべきである。
- ・九州の地も原子力を支えたい。
- ・地域発展を強く願う気持ちを知る機会となった。
- ・地層処分の正当性・安全性については、メディアも含めた国民への教育が必要だ。

<本日の対話会の企画などの改善点について>

- ・時間配分などがよかった。
- ・意外と時間が足らなかった。
- ・学生など若い方にも参加してほしい。
- ・次回は、反対派の人達にも入ってもらい、どんな議論になるか体感してみたい。

7)地層処分関連施設(幌延・深地層研究センター、六ヶ所・再処理施設等、東海・地層研究施設)見学についての関心:大変関心があり(13)、少し関心あり(5)

8)その他、高レベル放射性廃棄物・エネルギー問題などについて自由記述:

- ・原子力発電は必要、放射性廃棄物についても国民全体が自分事のように考えた方がよい。
- ・国が決定権を持つことにより、知事、自治体の長が個人的に攻められる状態をなくす。
- ・自分のごみは自分で処分という気持ちを小さなころから教育すべき。次世代が、ごみを宝物に変える技術を生み出すことになるかもしれない。
- ・高レベル放射性廃棄物の名前をプラス思考になるような名前に変えるべき。

7. 別添資料

- ・最終処分を巡る情勢(SNW坪谷隆夫会長)
- ・基調講演「高レベル放射性廃棄物最終処分を考えよう」(九州大学出光一哉教授)
- ・事後アンケート結果集計